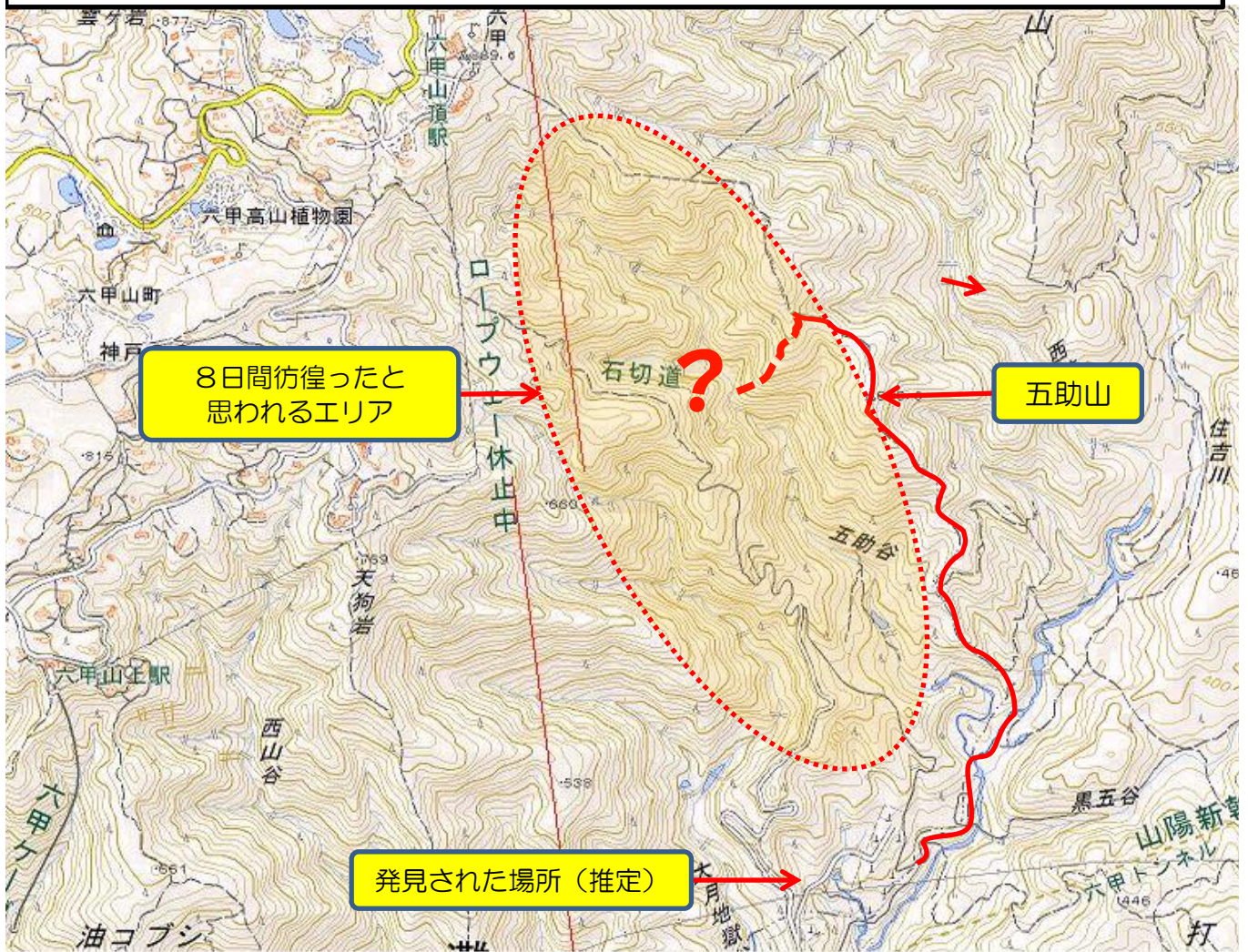


六甲山遭難(2007年9月)

「五助山を通り有馬へ行く」と妻に言い残し、山へ向かう。五助山への登山道は「熟練者向きコースです。迷いやすく、危険です。」という標柱がある。霧のため、道に迷い、山中で水を飲み救助を待ったが、8日後に自力下山を試みた結果、無事保護された。



解説

都会に近い六甲山での道迷い。64歳の男性が、霧のため方向が分らず、笹が多く道が不明になり迷ったものと思われる。残念ながら、携帯電話は持っていなかった。山中を行ったり来たりし、山の中を彷徨ったのだろう。体力も低下し、堰堤近くで山の水を飲み救助を待った。中々、救助されなかったため、ザックを捨て自力下山したところ、墓参りに霊園へ来ていた方に保護された。

高いところに登っていけば、六甲山があり、車が通っている道もある。登り道での道迷いか、下り道での出来事か不明だが、都会に近いエリアでも8日間彷徨うことになった。救助を待ち、体力の消耗を避ける事も必要だが、自力下山も必要である。この「救助を待つ」のか「自力下山」するのか、山が不慣れな方は迷うところである。都会に近いとはいえ、藪の中では、下ることも登ることも不安で、冷静ではいられなかっただろう。

どこにでも、道迷いは存在するので、どのように脱出したらいいのか常に考えておきたい事例である。少なくとも、電波の届くエリアでは、携帯電話は必ず持参しないといけないと思った。